

イストリア近現代史と郷土学習読本

Modern History of Istria and Local Studies Readers

石田 信一

ISHIDA Shinichi

要旨

クロアチアを構成する諸地域の中でも特殊な位置を占めるイストリア地方が学校教育の中でどのように取り扱われているのかについて、クロアチアで刊行された小中学校向けの郷土学習読本を中心に、「自然と社会」教科書や歴史教科書、学校用地図帳等も参照しながら、イストリア近現代史の出来事に関する記述に焦点をあてて考察した。クロアチアが(1)ユーゴスラヴィア(SFRJ)の構成

リア化の問題に加え、第二次世界大戦下の「人民解放闘争」に重点が置かれ、(2)においてはイタリア・ファシズム政権とユーゴスラヴィア共産主義政権による抑圧的な支配の問題およびクロアチア独立に伴う「祖国戦争」に重点が置かれていること、(3)においては近現代史の出来事に対する記述がほとんど無くなっていることが判明した。また、これとは別に、二〇一四年から「イストリア県の郷土学習」というプロジェクトが実践されており、「自然と社会」において郷土と関連づけた近現代史の出来事が取り上げられなくなったことを補いつつ、イストリアの地域アイデンティティを補強する試みとなっていることを指摘した。

共和国であった一九八〇年代、(2) SFRJから分離・独立した一九九〇年代、(3) HDZからの政権交代などにより民主化が進んで教科書・教材も多元化されていく二〇〇〇年代以降に刊行されたものを史料として用いている。(1)においては両大戦間期の共産党の活動や労働運動の展開、さらにイストリアのイタ

はじめに

イストリア(クロアチア語やスロヴェニア語ではイストラと呼ばれる)はアドリア海の最奥部、バルカン半島の北西端に位置し、クロアチア、スロヴェニア、イタリアにまたがるイストリア半島とその周辺の島々を指す地名である。イストリア半島のうち九〇%近い三〇〇〇平方キロほどがクロアチア領となっており、イストリア県の全域とプリモリエールスキ・コタル県の一部が含まれる。イストリアは現在のクロアチアの国旗が象徴するように、クロアチアを構成する五つの歴史的地域、すなわち狭義のクロアチア、スラヴォニア、ダルマチア、ドゥブロヴニク、イストリアの中の一つとして位置づけられているが、イストリア東部のラシャ川以北の地域が中世クロアチア王国に編入されていた時期があることを除けば、クロアチアとの関係は必ずしも密接であるとはいえず、第二次世界大戦後、「初めてイストリアがクロアチアに編入された」¹とする見方が一般的である。一九九一年から九二年にかけて、クロアチアでフランヨ・トゥジマン率いるクロアチア民主同盟(HDZ: Hrvatska demokratska zajednica) 政権の下でナシヨナリズムが高揚し、ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国(SFRJ)からの分離・独立を達成した時期に、イストリアでは「イストリア主義」を唱えて分権化と自治を主張する地域政党イストリア民主会議(IDSDI: Istarski demokratski sabor / Dieta demokracica istriana) が結成された。IDSDIはイストリア県議会における第一党であり続け、歴代のイストリア県知事を輩出して

きた^{2,3}。

このように、クロアチアを構成する諸地域の中でも特殊な位置を占めるイストリア地方が学校教育の中でどのように取り扱われているのが、本稿の問題設定である。それによって、クロアチアの学校教育におけるナシヨナル・ヒストリーとイストリア地方史の関係について明らかにすることを視野に入りたい。クロアチアの学校教育制度においては、社会主義期から現在に至るまで一貫して、自らの居住地域としての「郷土(zavica)」について詳しく学ぶのは八年制小学校一年生から四年生向けの「自然と社会」という科目においてであり、五年生から八年生で学ぶ歴史や地理においては断片的な記述しかない。

一九七〇年代の学習指導要領に該当する授業計画のガイドラインでは、とくに小学校三年生の「自然と社会」において「郷土の過去、現在、未来」と題する単元があり、三二時間があてられていた³。そこでは郷土学習によって「自らの民族への帰属意識と諸民族の友愛と統一の意識を高める」⁴という狙いも示されている。一方、現在のカリキュラムでも、同じく小学校三年生の「自然と社会」において「郷土の特徴が暮らし方に与える影響の事例を挙げること。郷土の独自性と認識・紋章、旗、土産、伝統、慣習、イベント、自然の美しさ、文化的・歴史的なスポット、国の休日・祝日・重要な日の祭典など。可能であれば、さまざまな施設を訪問すること。博物館、文書館、図書館など、保護地域、植物園、水族館、動物園など」⁵とされているものの、郷土の歴史に関する指示はほとんど無くなっており、それが郷土学習読本にも反映されている。

以下、本稿では、クロアチアで刊行された小中学校向けの副読本としての郷土学習読本を中心に、「自然と社会」教科書や歴史教科書、学校用地図帳等も参照しながら、イストリア地方史、とりわけイストリアにおける近現代史の出来事などのように取り上げられているのかを考察する。クロアチアが(1)ユーゴスラヴィア(SFRJ)の構成共和国であった一九八〇年代、(2)SFRJから分離・独立した一九九〇年代、(3)HDZからの政権交代などにより民主化が進んで教科書・教材も多元化されていく二〇〇〇年代以降に刊行されたものを史料として用いることで、個々の出来事に関する記述の特徴や変化を明らかにしたい。

なお、本稿では地名は原則として現在所属する国家における主要言語の名称で表記し、必要に応じてイタリア語等の名称を併記している。

1. イストリアについて

中世以降、イストリア半島周辺の島々を含むアドリア海沿岸部はヴェネツィア領、内陸部はオーストリア支配下のイストリア辺境伯領となっており、前述の通り、長らくクロアチアと一体化したことはなかった。以下、一八世紀末以降のイストリア近現代史を概観する。

一七九七年にヴェネツィアがナポレオン率いるフランス軍によって滅亡すると、イストリアを含む旧ヴェネツィア領はフランスがロンバルディアおよびネーデルラントを獲得する代償としてオーストリアに譲渡された。もっとも、一八〇五年にイストリアは再びフランス軍に占領さ

れ、翌年にはナポレオン自身を国王とするイタリア王国に編入され、さらに一八〇九年にはオーストリアから奪ったケルンテン、クライン(カルニオラ)、サヴァ川以南のクロアチア、ゴリツィア・グラディスカ、トリエステなどとともにフランス直轄のイリリア諸州の一州となった。

一八一三年、イストリアはイリリア諸州の他の地域とともにオーストリアに再征服され、ウィーン会議を経て、一八一六年には正式にオーストリア領イリリア王国の一部となった。さらに、一八四九年にイリリア王国が解体されてからは、イストリア辺境伯領のほかゲルツ(ゴリツィア)・グラディスカ伯爵領と自由帝国都市トリエステで構成されるオーストリア領キュステンラントの一部となった。キュステンラントの総督府がトリエステに置かれる一方、一八六一年以降、イストリア州議会がポレチに、ゲルツ・グラディスカ州議会がゲルツに設けられた。一九一〇年の国勢調査によれば、イストリアの人口は四〇万三五六六人、そのうちクロアチア人が四三・一五%、イタリア人が三八・一六%、スロヴェニア人が一四・八〇%、ドイツ人が三・一六%などとなっていた⁷⁾。

第一次世界大戦中、キュステンラントはオーストリア軍とイタリア軍が対峙する主戦場の一つとなった。とりわけ北部のソチャ(イゾンツォ)川流域では一二回にわたる会戦が繰り返され、多数の犠牲者を出したことで知られる。この大戦に敗れたオーストリアハンガリー帝国は解体し、キュステンラントはイタリア軍の占領下に置かれたが、一九二〇年一月にイタリア王国とセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国(一九二九年からユーゴスラヴィア王国)が締結したラバロ条約によ

り、カ斯塔ヴやクルク島と周辺の島々を例外として、ほぼその全域が正式にイタリア領として承認された。ラパロ条約において両国の境界にリエカ（フィウメ）自由国が創設されたが、一九二四年二月にあらためて両国の間でローマ条約が結ばれ、自由国の大半はイタリアに併合され、東部のスシヤク地区だけがセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国の帰属となった。かつてのオーストリア領キュステンラントはヴェネツィア・ジュリア（クロアチア語ではユリスカ・クライナ）と呼ばれるようになった。行政区分上、ヴェネツィア・ジュリアはゴリツィア県、トリエステ県、イストリア（ブーラ／ポーラ）県、クヴァルネル／カルナロ（リエカ／フィウメ）県に分けられた。

第二次世界大戦中、一九四一年四月にイタリア軍はユーゴスラヴィアに侵攻し、その国境地帯およびアドリア海沿岸部を併合した。クルク島、ラブ島、バカルがクヴァルネル県に編入されたほか、新たにリュブリャナ県が設けられ、ヴェネツィア・ジュリアの一部とみなされた。もともと、一九四三年九月にイタリアが降伏し、これに代わってドイツ軍がヴェネツィア・ジュリア一帯を占領したことで、これらの地域は新たな抵抗運動の舞台となった。一九四五年五月までにヨシブ・ブロス・チトー率いるユーゴスラヴィア共産党パルチザンを主力とするユーゴスラヴィア人民軍はヴェネツィア・ジュリアを占領することに成功した。もともと、イタリアとユーゴスラヴィアの国境画定は難航し、一九四五年六月の「モーガン線」では暫定的に英米軍占領下のA地区（ゴリツィア、トリエステ、セジヤナ、タルヴィジオまでの国境地帯とブーラ周辺の飛び地）

とユーゴスラヴィア占領下のB地区（A地区以外のリエカを含むヴェネツィア・ジュリアの三分の二ほどの地域）に分けられたものの、一九四七年二月のパリ講和条約によってラパロ条約とローマ条約でイタリアに割譲されたヴェネツィア・ジュリアの大半がユーゴスラヴィアに帰属することとなる一方、トリエステとその近郊には「トリエステ自由地域」が設けられることとなった。しかし、それさえも英米軍統治下のA地区（トリエステ市を含むミリエ／ムツジャまでの地域）とユーゴスラヴィア軍統治下のB地区（コベル、ピラン、ウマゲ、ノヴィグラードなどを含むイストリア北西部）に分けられた。これらの地域の民政移管が実現したのは一九五四年一〇月にイタリア、ユーゴスラヴィア、イギリス、アメリカ合衆国が締結したロンドン覚書によってであり、ユーゴスラヴィアにかなり有利な国境線の変更（西方への移動）を行った上で、A地区はイタリア政府、B地区はユーゴスラヴィア政府に移管された。もともと、イタリア議会はその批准に反対し、一九七五年一月のオージモ条約締結まで正式な国境線としては認められていなかった。

こうしてイストリア半島の大半はユーゴスラヴィア領となったが、連邦国家であるユーゴスラヴィアにおいて、なおイストリアはスロヴェニアとクロアチアに分断されることになった。前者にはコベル、イゾラ、ピラン、後者にはオパティヤ、バジン、ブイエ、ブゼト、ブーラ、ボレチ、ラビン、ロヴィニの各自治体が帰属していた。現在、後者のうちオパティヤのみがリエカを県庁所在地とするプリモリエールゴルスキ・コタル県に属しており、その他の自治体はバジンを県庁所在地とするイス

トリア県を構成している。一九九〇年代以降、ユーゴスラヴィアから独立したクロアチアの地方制度改革により、イストリア県だけでも四一の自治体に、またプリモリエールゴルスキ・コタル県の旧オパティヤ自治体は四つの自治体に細分化されている。これらの自治体のうちヴォドニャン、ウマグ、オパティヤ、ノヴィグラード、パジン、ブイエ、プゼト、プーラ、ポレチ、ラビン、ロヴィニはオプチナ (općina) と呼ばれる通常の自治体とは異なる「市 (grad)」として位置づけられている⁹⁾。

イストリア県に限れば、最近の国勢調査 (二〇二一年) の結果では、人口一九万五二三七人、その民族構成はクロアチア人七六・四%、地域的帰属五・一%、イタリア人五・〇%、セルビア人三・〇%、ボシュニャク人二・五%などとなっている。なお、ここでいう地域的帰属は主として「イストリア人」を自称する人々を指しているが、一九九一年の国勢調査における一八・一%から大きく減少している (その時点ではクロアチア人五四・六%、イタリア人七・五%、セルビア人四・八%、ムスリム人三・〇%などとなっていた)¹⁰⁾。また、住民に占めるクロアチア人の比率は全国レベルで過去最高の九一・六%に達する中で、イストリア県の数値は全国最低である。政治的には、前述のIDSが圧倒的な支持を得ており、自治を唱える地域政党が安定した基盤を維持してきたクロアチアで唯一の地域となっている¹¹⁾。

2. イストリアと第一次世界大戦

続いて、「自然と社会」の副読本としての郷土学習読本の記述を中心に、イストリア近現代史の出来事がどのように描かれているのかを分析していく。まず、第一次世界大戦と両大戦間期に関する記述を取り上げる。

社会主義期の郷土学習読本においては、第一次世界大戦に関する記述は非常に限定的であった。一九七〇年代半ばから、イストリアはリエカなどにも「リエカ自治体連合」を形成しており、郷土学習読本もこの地域を対象とする『リエカとイストリア』クヴァルネル・ゴルスキ・コタル地域』となっているが、そこでの記述は下記の通りである。

一九一四年、第一次世界大戦が始まった。私たちはハンガリーとオーストリアのために戦わなければならなかったが、誰もがこの外来の憎むべき帝国の崩壊を望んでいた。実際、一九一八年、第一次世界大戦後にオーストリア・ハンガリー国家は崩壊した。その時、のちにユーゴスラヴィア王国と呼ばれる最初のユーゴスラヴィア諸民族の国家が誕生した。「中略」イタリアとユーゴスラヴィアとの条約 (一九二〇年) により、イストリア、ツレス島、ロシニ島その他の私たちの地域がイタリアに帰属することになった。リエカは自由市であると宣言されたが、のちに (一九二四年) ファシストのイタリアに併合され、スィヤクがユーゴスラヴィアに残った。こうして、もう一度、人為的

な境界が私たちの郷土、そして人々を分断したのである¹²。

労働者の不満は第一次世界大戦末期にとくに高まった。ロシア一〇月革命（一九一七年）には私たちの郷土の人々も参加して、私たちの地方に強い反響をもたらした。当時とりわけ重要だったのはプーラの労働者と船乗りの革命運動である¹³。

なお、この読本では二〇世紀の当該地方における「労働運動」の展開について非常に詳しい記述があり、ここでは共産党の活動や一九二一年の「ラビン共和国」を含む、労働運動に限らない両大戦間期の情勢についても触れられている¹⁴。「イストリアにおける労働運動の発展にとつてとくに重要な意味を持ったのが、イストリア南部（プロシユティナ）の農民反乱とラビンの鉦山労働者の革命運動である」¹⁵といった記述もある。また、イタリアのファシスト政権に抵抗して処刑されたヴラデイミル・ゴルタンの比較的詳しい紹介もあり、「第一パルチザン・イストリア旅団はヴラデイミル・ゴルタンの名称を冠している。ベラム近くの彼が亡くなった場所にはゴルタンの立派な記念碑が建てられた」¹⁶という補足説明もある。

このように、この郷土学習読本には少なくとも郷土史との関わりでは第一次世界大戦中および戦後の状況に関して同時期の歴史教科書よりも詳しい記述が見られる一方¹⁷、現在の歴史研究では重要であるとみなされている出来事のうち、全く取り上げられていないものがある。第一に一九一五年のロンドン秘密条約とイタリアの協商国側での第一次世界大

戦参戦¹⁸、第二にオーストリア政府によるイストリア住民の域外退去¹⁹、第三にイストリア州議会の機能停止と住民の敵視・抑圧²⁰についてである。

一九九〇年代半ばから首都ザグレブおよび二〇県（ジュパニヤ）それぞれに郷土学習読本が刊行されたが、これらの読本には第一次世界大戦に関する記述はほとんど見られない。これらの読本のうち『イストリア県』には、第一次世界大戦後の情勢について、やや詳しい記述があり、こちらに重点が置かれているように見える。

一九一八年、第一次世界大戦終結後に私たちの郷土はイタリアに併合された。イタリア政府はイストリアのクロアチア人の民族的権利と個性を尊重することを約束した。すぐさま新政权は約束を守らないということが示された。すでに一九二一年には体系的にクロアチアの名称、シンボル、学校、公共の場でのクロアチア語の使用の禁止が始まった。とくにファシスト部隊がクロアチア人に対するテロを断行した。一九二二年にファシストが政権の座につくと、こうしたテロが合法化された。プロシユティナでの農民蜂起やラビンの鉦山労働者の反乱は、ヨーロッパにおけるファシズムに対する最初の抵抗の表明であった。クロアチア人の愛国者ヴラデイミル・ゴルタンはファシスト政権のメンバーによって一九二九年に処刑された²¹。

なお、同じ時期の小学校八年生向けの歴史教科書には、「失われたクロアチアの領土」として二頁にわたる詳しい記述があり、クロアチアのアドリア海沿岸地域に対するイタリアの領土的野心、第一次世界大戦後の「アドリア海問題」の発生、その解決策としてのクロアチアおよびクロアチア人に不利益をもたらすラパロ条約とローマ協定が取り上げられている²²。また、社会主義期の読本には描かれていなかった前述の三項目については、この時期以降の読本でも触れられていない（むろん、イタリアの協商国側での参戦については、歴史教科書には言及がある）。

さらに、二〇一〇年に同じ出版社の郷土学習読本の新版が刊行された際には、第一次世界大戦に関する記述も両大戦間期の情勢に関する記述もほぼ無くなり、「ヴェネツィアの後、オーストリアがやって来て、第一次世界大戦の終わりまで支配した。それから、私たちの郷土はイタリアに帰属することになった」²³という簡潔な記述のみが掲載されている。なお、小学校八年生向け歴史教科書においては、従来と変わらない第一次世界大戦後の「アドリア海問題」とイタリア支配下のクロアチア人やスロヴェニア人の境遇（イタリア化）に関する詳しい記述が見られ、歴史認識自体が変化したわけではないことが確認できる²⁴。

3. イストリアと第二次世界大戦

社会主義期のユーゴスラヴィア（一九四五年〜一九〇年）において、第二次世界大戦は「人民解放闘争」と「社会主義革命」の時期として位置

づけられ、自らの権力を確立した時期であったため、この時期の郷土学習読本には当然ながら第二次世界大戦中の出来事について非常に詳しい記述があった。ユーゴスラヴィアが枢軸諸国の軍事侵攻を受けて分割占領されたのは一九四一年四月であったが、イタリア領であったイストリアでユーゴスラヴィア共産党バルチザンの影響を受けて抵抗運動が組織されるようになったのは翌一九四二年のことであったとされる。イストリアに関しては、前述の『リエカとイストリア』クヴァルネル・ゴルスキ・コタル地域』はリエカに重点を置いているため、イストリアに関する記述は必ずしも多くはないが、その一部を引用する。

一九四二年、イストリアにおいて武力闘争が展開されるようになった。すぐにプラニクで最初のイストリア・バルチザン分遣隊が出現し、それから第一イストリア・バルチザン中隊が創設された。イストリアにおける蜂起の焦点の一つがチチャリヤのブルグダツ村であった。その周辺にイストリアで最初の解放区が設けられた²⁵。

すべての戦線で敗退したイタリアは一九四三年九月八日に投降した。共産党員に率いられた私たち人民はイタリア軍を武装解除し、イストリア、クヴァルネル地域、ゴルスキ・コタル全土を解放した（いくつかの大都市を除いて）。イタリア軍の武装解除にはイタリア人反ファシストも参加した。ラバ島の強制収容所から四〇〇〇人以上の収容者が解放された。

イタリアが投降してから数日後、イストリア人民解放委員会はイストリアを母国と統合する決議を行った。この決議はクロアチア人民解放国家反ファシスト評議会（ZAVNOH）で承認された。イストリア人民は喜んでこの知らせを受け、パジンではイストリア議会が開かれた。そこでヨアキム・ラコヴァツを委員長とするイストリア地方委員会が選出された。ZAVNOHの決議はユーゴスラヴィア人民解放反ファシスト評議会（AVNOJ）でも確認された²⁶。

一九四四年の下半期にイストリアでは三つの旅団が戦闘を行った。それらは第四三イストリア師団に結集した。イタリア人大隊「ピノ・ブディチン」も創設された。この大隊は第四三イストリア師団の中でイストリア、スロヴェニア、ゴルスキ・コタルのファシストとの戦闘を遂行した。彼らは肩を並べて戦い、共同攻撃ではお互いに寄り添ってクロアチア人、スロヴェニア人、セルビア人、イタリア人、その他の人々の自由と正義のために命を失った。

一九四五年には解放のための最後の戦闘が行われた。それによりユーゴスラヴィア軍はクヴァルネル地方、ゴルスキ・コタル、イストリアを解放した。一九四五年五月九日、プーラにあった敵の最後の要塞が降伏した。自由の歌が町や村に響き渡った。それは二重の祝賀であった。私たちの祖国が解放され、イストリア、リエカ、ツレス、ロシニ、その他の地域がクロアチア、

そしてユーゴスラヴィアに戻ったことである。人民解放闘争と社会主義革命が勝利に終わったことで、新たな道、社会主義建設の道が開かれた²⁷。

なお、これらが掲載されている頁には、数点の写真も掲載されている。イストリアに直接関連するものでは、①プゼト近郊のスヴェティ・ドナトにあるイストリア最初のパルチザン学校があった建物（この建物の近くで、一九四四年三月三一日にこの学校の教師ヴァズモスラヴ・ゲルジャリヤが亡くなった」という説明つき）、②ロヴィニのクロアチア人とイタリア人のための記念墓碑（「記念碑の手前には人民英雄ピノ・ブディチンとマテオ・バヌツシの銅像がある」という説明つき）、③ウチユカにおける第一イストリア旅団、④戦争の最終局面でモシユチエニチュカ・ドラガに上陸するユーゴスラヴィア軍の写真が挙げられる。

この読本では、「数多くの記念銘板、記念像、墓碑、記念碑が、自由のための戦いがいかに厳しいものであったかを物語っている」として、記念銘板の一例の紹介がなされており、興味深いものとなっている²⁸（ただし、イストリアの事例はない）。また、この郷土学習読本シリーズには第二次世界大戦に関連する現地出身の「人民英雄」²⁹に関する章があり、『リエカとイストリア』クヴァルネル・ゴルスキ・コタル地域には三四名の「人民英雄」の氏名と出身地が掲載されている（うち一〇名がイストリア出身者）³⁰。なお、やや奇妙なことには、イストリアに直接関わる第二次世界大戦後のユーゴスラヴィア・イタリア間の国境画

定問題、いわゆるトリエステ問題と、それに関連するイタリア人の虐殺（いわゆるフォイベの虐殺）や国外脱出については、郷土学習読本には言及が無い。なお、小学校八年生向けの歴史教科書でさえ、トリエステ問題を取り上げているものの、イタリア人の虐殺や国外脱出には全く言及が無いことは同じである³¹。

このように、社会主義期に見られた第二次世界大戦（あるいは人民解放闘争）に関する非常に詳しい記述は、クロアチア独立後、大幅に削減された。それでも、一九九〇年代半ばに刊行された前述の『イストリア県』には、以下の記述が見られる。

イストリアにおける一九四一年から一九四五年にかけての人民解放闘争と反ファシスト運動は、イストリアのファシズムからの解放と新たな南スラヴ国家における母国クロアチアとの統一という目的を持っていた。一九四三年九月にイタリアが降伏すると、私たちの郷土では大規模な蜂起が起こった。クロアチア人以外に、蜂起にはイタリア人反ファシストも参加した。

イストリアのその後の運命にとって、一九四三年九月に反ファシスト運動の執行部が行った決議（九月決議）が重要な役割を果たした。最初にイストリア地区人民解放委員会が一九四三年九月一日にパジンでイストリアの母国クロアチアとの統一に関する宣言を發した。続いて、この重要な行為が一九四三年九月二五日にパジンでのイストリア代表者の会合で

追認された³²。その際、地方人民解放委員会が「イストリア人の政治的代表機関」として創設された。こうして、私たちの郷土は永遠に母国クロアチアに復帰したのである³³。

従来通り第二次世界大戦を「人民解放闘争」として捉えている一方、一九八〇年代までの読本とは異なり、パルチザンや「人民英雄」に関する言及が全く無いことが特徴的である。トリエステ問題と、それに関連するイタリア人の虐殺や国外脱出について全く触れていないことは従来と同じである（この点は歴史教科書も同様である）³⁴。いずれにしても、第二次世界大戦に関連する記述が大幅に削減されていることは事実である。なお、図版として「イストリアの母国クロアチアとの統一に関する宣言、一九四三年九月一日」と「一九四五年四月末のヴェリ・ブリュン爆撃の結果」の写真が掲載されている³⁵。

一方、この郷土学習読本では、第二次世界大戦後の社会主義期に関する非常に批判的な記述が目につく。以下の通り、両大戦間期のイタリア支配下のイストリアと似たような評価も見られる。

共産主義者のテロによって数多くのイストリア住民、イタリア人、そしてクロアチア人までもが郷土を離れてイタリアや海外諸国へと出て行った。逆に、イストリアにユーゴスラヴィアの他の地域（最も多いのはセルビア）からの住民が移住してきた。支配的な共産主義イデオロギーの支持者として、これらの

移住者はあらゆる重要な地位を学校教育、司法、経済、スポーツで得た。あらゆるクロアチア的なものへの敵対感情から、体系的・計画的に私たちの郷土におけるクロアチア人という存在の破壊を行った。

二〇世紀の短い期間に私たちの郷土をファシズムと共産主義という二つの暗黒の独裁体制が支配した。両者とも外部（イタリアとユーゴスラヴィア）から持ち込まれ、イストリアのクロアチア人に敵対的であった。³⁶

なお、二〇一〇年に同じ出版社の郷土学習読本の新版が刊行された際には、「一九四三年九月一三日、パジンでイストリアの祖国クロアチアとの統一に関する宣言が発せられた。第二次世界大戦後に母国クロアチアとともにユーゴスラヴィアの一部となった」³⁷との記述のみが掲載され、写真は一点も無くなっている。社会主義期に関する特段の評価等も無い。そもそも、この読本では郷土史は一頁にも満たない分量で要点が示されるだけで、郷土学習の重要な要素では無くなっているように見える。

4. クロアチアの「祖国戦争」とイストリア

一九九一年六月二五日、クロアチアの主権・独立宣言が行われると、これを阻もうとするユーゴスラヴィア人民軍、セルビア人準軍事組織お

よびクロアチア在住のセルビア人マイノリティの武装勢力との間でクロアチア独立戦争が本格化した。クロアチアでは一般的に「祖国戦争 (Domovinski rat)」と呼ばれる。この戦争は一九九五年一月のエルドゥト合意および同年一二月の Dayton 合意で終結した。ただし、セルビアとの国境地帯に位置する東スラヴォニア、バラニャ、西スリエムがクロアチアに再統合されたのは一九九八年一月のことである。

この戦争は学校教育のクロアチア化を進めていた HDZ 政権の下で、同時進行的に学校教育の場に反映された。一九九〇年代半ばに刊行された前述の郷土学習読本『イストリア県』には、以下の記述が見られる。やや長くなるが、引用したい。

私たちの郷土は直接戦争による破壊を受けたわけではない。その理由は、イストリアが大セルビア計画に含まれていなかったことにあり、またできるだけ多くのクロアチアの地域を戦争による破壊から守ろうとする国家指導部の努力によるものでもあった。それでも、イストリアとイストリア住民はクロアチアの防衛のために大きな貢献を果たした。多くのイストリア住民がクロアチア各地の戦場に加わり、その中にはクロアチアの自由のために自らの命を擲った者もいる。イストリアでは避難してきた人々の世話がなされ、クロアチア各地の戦争による破壊に対する支援が集められた。

一九九一年の秋は、イストリアでも非常に緊迫したもので

あった。自称「ユーゴスラヴィア人民軍」が私たちの郷土から撤退した一二月一六日までの最も重要な戦争中の出来事を月ごとに紹介しよう。

一〇月

- ・ 治安状況の悪化と侵略者が私たちの郷土を攻撃する危険性から、学校における活動が停止した。国家指導部と地方当局はイストリアに平和を維持するため、あらゆる手段を講じた。同時に、戦災がイストリアにまで及ぶ場合に備えて必要な準備を行った。

- ・ ブイエ地方のベトロヴィヤ戦車部隊、サヴドリヤのリーダー基地から「ユーゴスラヴィア人民軍が」撤退し、バジン駐屯地からプーラへの移転を開始した。

- ・ クロアチア国防隊³⁸イストリア第一一九旅団が設立された。

- ・ 「学びたい、生きたい、働きたい」をスローガンとする中学生と教師のパレードが開催された。

- ・ イストリアの産業が生産増加によってクロアチア全土を助けられる可能性が検討された。

- ・ プーラの軍事病院の高価な精密機器が粗末に扱われ持ち出された。

一一月

- ・ 状況の悪化と戦争による破壊の危険性から、幼稚園と小学校が再び活動を停止した。

- ・ ヴコヴァルの苦しみへの共感がプーラの通りに書かれた落書きを通じて表明され、非公式にヴコヴァル通りと呼ばれるようになった。

- ・ 軍用空港を離れながら、占領軍は隠された地雷原を残した。

- ・ 内務省員二名と国防隊員二名が亡くなった。

一二月

- ・ プーラ警察署のパトロールが襲撃された。その目的は恐怖を植え付け、争いを起こさせることであった。

- ・ 実際には占領軍である自称「ユーゴスラヴィア人民軍」の最後のメンバーが一二月一六日にイストリアを離れた。

- ・ 占領軍の航空機がヴルサルのスポート用空港を砲撃した。二名が亡くなり、滑走路が破壊され、管制塔が損傷を受けた。³⁹

なお、この『イストリア県』における記述は実際には写真（クロアチア国防隊第一一九旅団）を含めて二頁ほどであるが、同様の記述は直接戦場となった『ドゥプロヴニク県』の読本では九頁、『オシエク県』の読本では七頁が割かれており、これよりはるかに長く詳しいものとなっている⁴⁰。

その後、二〇一〇年に同じ出版社の郷土学習読本の新版が刊行された際、「祖国戦争」に焦点をあてた、しばしばセルビアに敵対的な記述はほとんどが削除された。これは二〇〇〇年代を通じて行われた教科書の

多元化（複数の出版社による異なる教科書の選択制の導入）をはじめとする教育改革を通じて実現していった面もある。すでに述べた通り、これらの読本では郷土史はこれまでに比べて明らかに軽視されているが、『イストリア県』の読本でも、「一九九一年から九五五年までクロアチアは防衛のための祖国戦争を遂行し、そこには数多くのイストリア住民も参加した」⁴¹という記述しか無い。同様に、別の出版社（アルファ社）から刊行された郷土学習読本でも、「誇らしくも長きにわたる平和的とはいえない過去から、イストリアは祖国戦争でもう一度その力を示した。数多くの難民・避難民のための新しい故郷となったのである」⁴²とだけ記されている。前述の通り、郷土史（県レベルでの地方史）が郷土学習の重要な要素では無くなっており、「祖国戦争」に関する記述が大幅に削除されていることは他県の場合でも共通している⁴³。

もつとも、郷土学習読本に掲載されていないからといって、「祖国戦争」が軽視されるようになったわけではない。イストリア県でも、二〇一八年には『祖国戦争におけるイストリア』⁴⁴と題する書籍が刊行されているし、各地で「戦勝記念日・祖国感謝の日・クロアチア防衛者の日」にあたる八月五日や諸聖人の日を迎える一〇月末などに公式の記念行事や退役軍人らによるパレードが行われている。プーラのフランニョ・ヨシブ（フランツ・ヨーゼフ）公園には祖国戦争における戦死者の慰霊碑があり、そこで行われる記念行事も広く知られている。二〇二三年八月五日には、イストリア県の「祖国戦争」参加者（「防衛者（braničelj）」と呼ばれる）による一一回目のパレードに二〇〇〇人を超える参加者があり、

式典にはイストリア県のボリス・ミレティッチ知事らが出席している⁴⁵。

むすびにかえて

本稿では、クロアチアが（1）ユーゴスラヴィア（SFRJ）の構成共和国であった一九八〇年代、（2）SFRJから分離・独立した一九九〇年代、（3）HDZからの政権交代などにより民主化が進んで教科書・教材も多元化されていく二〇〇〇年代以降に刊行された小中学校向けの郷土学習読本を中心に、「自然と社会」教科書や歴史教科書、学校用地図帳等も参照しながら、イストリア近現代史の出来事に関する記述に焦点をあてて考察してきた。（1）においては両大戦間期の共産党の活動や労働運動の展開、さらにイストリアのイタリア化の問題に加え、第二次世界大戦下の「人民解放闘争」に重点が置かれ、（2）においてはイタリア・ファシズム政権とユーゴスラヴィア共産主義政権による抑圧的な支配の問題およびクロアチア独立に伴う「祖国戦争」に重点が置かれていること、（3）においてはイタリア化の問題を含めて近現代史の出来事に対する記述がほとんど無くなっていることが判明した。少なくとも「自然と社会」で用いる郷土学習読本を見る限り、郷土史の視点が失われているように見える。

もつとも、副教材としての郷土学習読本の内容を分析しただけでは、実際に「自然と社会」の授業で郷土史を学んでいないとまでは言えない。

授業の実態を含めて、さらなる検証が必要であろう。実際、イストリア県では二〇一四年より就学前教育から後期中等教育（日本の高等学校に相当する）までを対象として「イストリアの郷土アイデンティティの保持の制度的形態を形成し、自らの地域の豊かさと私たちの地域の独自性を保持すること」を目的とする「イストリア県の郷土学習」⁴⁶というプロジェクトが実践されている。その指導書を見る限り、「自然と社会」において郷土と関連づけた近現代史の出来事が取り上げられなくなったことを補いつつ、イストリアの地域アイデンティティを補強する試みとなっているようである⁴⁷。その詳細な分析を含めて、クロアチアの学校教育におけるナショナル・ヒストリーとイストリア地方史の関係を明らかにする作業に継続的に取り組んでいくこととしたい。

注

- 1 Krešimir Erdelija, Igor Stojaković, *Klio 8. Učbenik povijesti u osmom razredu osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2021, p.137.
- 2 イストリア民主会議とその地域主義に関する研究は少なくないが、本稿の主題ではないため、その分析は割愛する。John Ashbrook, *Buying and Selling the Istrian Coast. Istrian Regionalism, Croatian Nationalism, and EU Enlargement*, Brussels: Peter Lang, 2008; Višeslav Raos, *Territorialnost i identitet Istarski demokratski sabor i Sjeverna liga*, Zagreb: Fakultet političkih znanosti Sveučilišta u Zagrebu, 2014; Tatjana Tomatić, *IDS – neuspjeh istarskog regionalizma. Istarski regionalizam. Politika identiteta IDS-a 1990.-2003.*, Zagreb: Despot infinitus, 2018.
- 3 Socijalistička Republika Hrvatska. Zavod za unapređivanje osnovnog obrazovanja,

Naša osnovna škola. Odbogojno-obrazovna struktura, 2. neizmijenjeno izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 1974, pp.120-121.

4 *Ibid.*, p.129

5 Odluka o donošenju kurikula za nastavni predmet Priroda i društva za osnovne škole u Republici Hrvatskoj, *Narodne novine*, 7/2019 (22.1.2019).

6 Darko Dukovski, *Iskra: kratka povijest dugoga trajanja od prvih naseobina do danas*, Pula: Istarski ogranak Društva hrvatskih književnika, 2004; Marko Trogrlič, Nevio Šetić, *Dalmacija i Iskra u 19. stoljeću*, Zagreb: Leykam international, 2015; Darko Dukovski, *Iskra i Rijeka u prvoj polovici 20. stoljeća (1918.-1947.)*, Zagreb: Leykam international, 2010 ほか参照。Rani naponi naroda Juliske krajine za oslobođenje i prisajedinjenje Jugoslaviji, Beograd: Ministarstvo narodne odbrane, 1945; *Iskra i slovensko primorje. Borba za slobodu kroz vjekove*, Beograd: Rad, 1952 など。またトリエスタ問題が解決していなかった時期に刊行されたイストリアおよびトリエスタに関する、しばしばプロパガンダの要素を含む多数の文献も参考になる。

7 Marko Trogrlič et al., *Dalmacija i Iskra u 19. stoljeću*, p.202.

8 クロアチアの地方制度の変遷については、以下を参照。Juraj Hžbenjak, *Lokalna samouprava i uprava u Republici Hrvatskoj*, Zagreb: Informator, 1993; Ivo Goldstein et al., *Hrvatske županije kroz stoljeća*, Zagreb: Školska knjiga, 1996;

9 Stanovništvo prema narodnosti po gradovima/općinama, Popis 2021 [https://dzs.gov.hr/naslovna-blokovi/u-fokusu/popis-2021/88] 以下、ウェブサイトの最終閲覧日は二〇二四年二月二四日。

10 *Statistički ljetopis hrvatskih županija 1993*, Zagreb: DZS, 1994, pp.78-79.

11 二〇二一年にイストリア民主会議の候補として当選したイストリア県知事ボリス・シレティチが二〇二二年に党内抗争もあって離党したため、イストリア

- 民主会議は初めて県知事のポストを失った。Istarski župan Boris Miletić istupio iz IDS-a, *Glas Istre*, 05.02.2022. [https://www.glasistre.hr/istra/bois-miletic-napustio-ids-774723]
- 12 Kamilo Bišćan, Milan Cerovac, Ivo Flajšman, Božo Jakovljević, Vladimir Mance, *Riječka, istarsko-kvarnersko-goranski kraj. Priručnik za učenike*, VII. dopunjeno izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 1986, p.36.
- 13 *Ibid.*, p.38.
- 14 *Ibid.*, pp.38-40. 「ラビン共和国」はイストリア東部の都市ラビンにおける鉱山労働者のストライキを契機に一九二一年三月二日から四月八日まで続いた鉱山労働者の自治政府の通称。この読本にはラビン市内に残された「ラビン共和国」の記念碑と郊外にある「ラビン共和国」の犠牲者の名前を刻んだ記念銘板の写真も掲載されている。
- 15 *Ibid.*, p.38.
- 16 *Ibid.*, p.52.
- 17 小学校八年生向け歴史教科書では、第一次世界大戦後のイストリアの状況について「イストリア、スロヴェニア沿海地方、ゴリツィアに住む約六〇万人のクロアチア人とスロヴェニア人が外国の支配下に入り、イタリア・ファシズムが推進した残忍な脱民族化政策に晒された」と描かれている。Rene Lovrenčić, Ivo Jelčić, Radovan Vukadinović, Dušan Blandžić, Čojek u svom vremenu 4 [udžbenik za VIII. razred osnovne škole], Zagreb: Školska knjiga, 1991, p.54.
- 18 イタリアはイストリアを含む「未回収のイタリア」の獲得を目的に、同盟国であったオーストリア・ハンガリーの側に立って第一次世界大戦に参戦することなく、一九一五年四月二六日にイギリス、フランス、ロシアとロンドン秘密条約に署名して、敵対する協商国（連合国）の側に立って参戦することを選んだ。この秘密条約により、イタリアは南チロルやトリエステ、ゴリツィア、ゲ
- ラディシユカなどとあわせてヴォオロスコ、マトウーリ、カスタヴ、ツレス島とロシニ島および周囲の多数の小島を含むクヴァルネル湾までのイストリア全土を獲得することを約束された。Londnski ugovor, *Istrpedia: istarska internetna enciklopedija*. [https://www.istrapedia.hr/natuknice/86/londonski-ugovor] ロンドン秘密条約の原文は 'Agreement between France, Russia, Great Britain and Italy, signed at London, April 26, 1915, London: His Majesty Stationery Office, 1920 等を参照。
- 19 一九一五年五月にイタリアと交戦状態に入ってから、軍港ブーラのあるイストリア南部（概ねラビン〜カンファナル〜ロヴィニを結ぶ線より南側）から約六万人ともいわれる住民がオーストリア、チエコ、ハンガリーなどに一時避難させられた。彼らは収容所に置かれることもあり、病气や饑餓で亡くなる者も多かった。Marko Trogrlič et al., *Dalmacija i Iskra u 19. stoljeću*, p.226. オーストリアのゲミュント収容所だけでも、イストリアからの避難民一万五〇〇〇人のうち五〇〇〇人が亡くなったとされる。Gmund, *Istrpedia: istarska internetna enciklopedija*. [https://www.istrapedia.hr/natuknice/2361/gmund]
- 20 戦時下において、イストリア州議会は開催されず、オーストリア当局によるイストリア住民の敵視・迫害が行われた。Marko Trogrlič et al., *Dalmacija i Iskra u 19. stoljeću*, p.226.
- 21 Ivan Bertić, Stipan Trogrlič, *Istarska županija. Priručnik za zavičajnu nastavu*, Zagreb: Školska knjiga, 1996, pp.73-74.
- 22 Ivo Perić, *Povijest za VIII. razred osnovne škole*, 3. izd., Zagreb: Alfa, 1998, pp.16-17.
- 23 Rosanna Biasiol-Babić, Ivanka Šverko-Blašković, *Istarska županija. Zavičajni priručnik za učenice i učenike*, Zagreb: Školska knjiga, 2010, p.69.
- 24 Kresimir Erdelja, Igor Stojaković, *Tragom prošlosti 8: udžbenik povijesti u osmom*

- razredu osnovne škole, Zagreb: Školska knjiga, 2014, pp.71-72; Snježana Koren, *Povijest 8: udžbenik povijesti za osmi razred osnovne škole*, Zagreb: Profil, 2014, pp.101-103; Vesna Đurić, *Vremeplov 8: udžbenik povijesti za osmi razred osnovne škole*, Zagreb: Profil, pp.88-93; Stjepan Bekavac, Mario Jareb, *Povijest 8: udžbenik za osmi razred osnovne škole*, Zagreb: Alfa, 2014, pp.46-47.
- 25 Kamilo Bišćan et al., *Rijeka, istarsko-kvarnersko-goranski kraj*, p.41.
- 26 *Ibid.*, p.43.
- 27 *Ibid.*, p.44.
- 28 *Ibid.*, p.46.
- 29 「人民英雄」は「人民解放戦争・社会主義革命における最も優れて最も勇敢な闘士たち」と定義され、「その中には私たちの最大の英雄、同志チトーも含まれる」との記述がある。*Ibid.*, p.53. 実際には、「人民英雄」は人民英雄勲章を授与された者で、その数は一三三二名に上る。なお、人民英雄勲章の上位に自由勲章、さらに上位（最高位）に「ユーゴスラヴィアの星」勲章があったが、チトーはその両方に加えて、人民英雄勲章を三回授与されている。ユーゴスラヴィアの叙勲制度については、*Odlikovanja iz legata istorijskog arhiva Beograda: katalog izložbe*, Beograd: Istorijski arhiv, 2015 等を参照。
- 30 Kamilo Bišćan et al., *Rijeka, istarsko-kvarnersko-goranski kraj*, p.53.
- 31 Rene Lovrenčić et al., *Čovjek u svom vremenu 4*, pp.138-139.
- 32 「イストリア、リエカ、ザダルおよび島嶼を祖国クロアチアに併合する決議」が採択された九月二五日は、イストリア県が誕生した翌年の一九九四年から「イストリア県の日」として祝われ、二〇〇五年からはクロアチアの法定記念日（祝日ではない）の「イストリアの日」³⁹。Zakon o dopunama Zakona o blagdanima, spomenanima i neradnim danima u Republici Hrvatskoj, *Narodne novine*, 112/2005 (23.9.2005.); Dan Istarske Županije. [http://www.ss-ekonomska-pu-skole.hr/upload/ss-ekonomska-pu/images/newsimg/11965/File/Dan%20Istarske%20Zupanije%20-%201_.pdf]
- 33 Ivan Bertić et al., *Istarska županija*, p.74.
- 34 Ivo Perić, *Povijest za VIII. razred*, p.88. 「第二次世界大戦の講和条約によって」イタリアはかつて一九二〇年のラパロ条約に基づいて所有していたクロアチア人とスロヴェニア人の諸地域を放棄しなければならなかった」とだけ書かれており、トリエステ問題にも触れていない。
- 35 Ivan Bertić et al., *Istarska županija*, pp.75-76.
- 36 *Ibid.*, pp.74-75.
- 37 Rosanna Biasio-Babić et al., *Istarska županija*, p.69.
- 38 クロアチア国防隊 (Zbor narodne garde) は一九九一年四月から五月にかけて法的整備と組織化がなされ、五月二八日に軍事パレードの形で公開された、現在のクロアチア共和国軍の前身となる軍事組織。現在、五月二八日は「クロアチア共和国軍の日・クロアチア陸軍の日」となっている。実際には同年九月二〇日に公示された国防法によりクロアチア軍 (Hrvatska vojska) と併記されてクロアチア共和国軍 (Oružane snage RH) の一部となり、一月三日にはクロアチア軍に組み込まれた。なお、この読本の記述（二〇月）とは異なり、現在では第一一九旅団の創設の時期は九月七日とされている³⁹。Bošnjak: Sve više će se cijeliti uspjeh 119. brigade u očuvanju mira u Istri, *Regional Express*, 05.09.2014. [https://www.regionalexpress.hr/site/more/bosnjak-sve-vishe-e-se-cijeliti-uspjeh-119.-brigade-u-ochuvanju-mira-u-istri]
- 39 Ivan Bertić et al., *Istarska županija*, pp.77-78.
- 40 Josip Lučić, *Dubrovačko-neretvanska županija. Priručnik za zavičajnu nastavu*, Zagreb: Školska knjiga, 1996, pp.79-87; Frano Dragun, Stjepan Sršan, *Ostječko-baranjska županija. Priručnik za zavičajnu nastavu*, Zagreb: Školska knjiga, 1996,

- pp.70-76.
- 41 Rosanna Biasiol-Babić et al., *Istarska županija*, p.69.
- 42 Nada Andonović, Ljubica Goricanec, Bojana Popić, *Istarska županija. Zavičajni priručnik za treći razred osnovne škole*, 3. izdanje, Zagreb: Alfa, 2018, p.32.
- 43 例えに、激しい戦場となった『オシエツコ・バラニヤ県』の郷土学習読本でも、郷土史を概観する項目は無く、県内各地を紹介する際に歴史的建築物や記念碑等の写真が簡単な説明とともに掲載される程度である。Ljiljana Stanfelj et al., *Osiječko-baranjska županija. Priručnik za učenike 3. razreda osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2018.
- 44 Darko Dukovski, Vedran Dukovski, Dario Matika, *Istra u Domovinskom ratu 1991. – 1995. Model društvene i vojne povijesti*, Pula: Istarski ogranak DHK, 2018.
- 45 Mirohodom hrvatskih branitelja i ove godine u Puli obilježen Dan pobjede i domovinske zahvalnosti i Dan hrvatskih branitelja, *pula* + (Grad Pula), 05.08.2023. [<https://www.pula.hr/hr/novosti/detail/25716/mirohodom-hrvatskih-branitelja-i-ove-godine-u-puli-obiljezen-dan-pobjede-i-domovinske-zahvalnosti-i-dan-hrvatskih-branitelja/>]
- 46 Zavičajna nastava Istarske županije. [<https://www.za-nas.hr/>]
- 47 *ISTRŽIVANJE – priručnik za implementaciju zavičajne pismenosti u vrtiće, osnovne i srednje škole Istarske županije*, Pula: Istarska županija, 2023.